

『住吉物語』と『夜の寝覚』

— 設定の類似と新しい主人公像の創造 —

辛 在 仁

はじめに

本稿の目的は、現存本『住吉物語』⁽¹⁾を通じて古本『住吉物語』⁽²⁾の影を平安後期の『夜の寝覚』(一〇五〇年頃)から探り、さらには両物語の影響関係の分析を通して平安時代の物語の変貌を主人公像から見通してみることにある。

現存本『住吉物語』には、知られているだけで一二〇本以上の伝本があり、友久武文の分類によれば、一八種類の異本群が存在する。⁽³⁾しかし、根幹となっている筋はほぼ同じであり、重要場面の描写・用語にも諸本間の共通性が高いとされ、すべて同一祖本から派生したものとみられている。⁽⁴⁾

『枕草子』や『源氏物語』で触れられているいわゆる古本『住吉物語』の内容も、現存本『住吉物語』の内容によってほぼ窺い知ることができるとされるが、⁽⁵⁾一方では古本『住吉物語』と現存本『住吉物語』の間には埋められない距離があるとい

う説もあるから、⁽⁶⁾散佚した古本『住吉物語』の内容復原の問題はまだ未解決であるといえよう。

現存本『住吉物語』の内容は、継子奇め譚の『落窪物語』とよく対照されることから窺えるように継子の婚姻譚である。母なき宮腹の姫君は「あはれと思へども、人目のつつまじさにこそ」⁽⁷⁾(六八頁)と男君の求愛を受け入れなかった。ついに姫君は継母の苛めを避けて住吉に身を隠し、男君は長谷観音の靈験に導かれて住吉まで姫君を探したずねてくる。やがて二人は結ばれて、継母側は没落する、というのが大体の骨子である。

一方、『夜の寝覚』は一説に菅原孝標女(一〇〇八?)の作といわれる物語である。物語は、相手の正体に気づかずに中の君と契りを結んでしまった男君があいにくも彼女の姉大君と結婚してしまうという、一人の男性をめぐる姉妹の三角関係の葛藤により繰り広げられる。ヒロインである寝覚の中

の君（以下、中の君と呼ぶ）は恋の悩みを家族愛や自らの成長へと昇華させる女になりおおせる。

このように、相違する時代に成立した現存本『住吉物語』と『夜の寝覚』は、同じく姉妹の結婚相手が取り違えられるという設定を取り入れている。現存本『住吉物語』でも、男君は姫君の異腹の姉妹である三の君の夫であり、姫君にとって男君は義理の兄にあたる。つまり、両物語の男女主人公は社会的に許されにくいタブーの関係にあるのである。

継母による仕組まれた取り違えと、皮肉な運命の取り違えという相違はあるものの、両物語の設定の類似とその意義に關してはこれまであまり論じられてこなかった。⁽⁹⁾そこで、本稿では継子の婚姻譚として幅広く享受されてきた古本『住吉物語』の影響を『夜の寝覚』から見届けることにより、一つの話型がどのように以後の物語史に影響し、そこからいかに多様な物語の人物像が生まれてきたかを浮き彫りにしたいと思う。

古本『住吉物語』が散佚している現時点では、時代的に現存本『住吉物語』より早く成立している『夜の寝覚』から現存本『住吉物語』への影響という可能性も皆無とはいえない。しかし、現存本『住吉物語』が古本『住吉物語』の設定を引き継いでいるとされるからには、古本『住吉物語』から『夜の寝覚』、そして現存本『住吉物語』の順に同じ設定が受け継が

れていったという推定が成り立つ。となると、『枕草子』や『源氏物語』の時代を過ぎて平安後期に至ってからも、一〇五〇年頃に成立したとされる『夜の寝覚』の中に古本『住吉物語』の影を目にすることができるといふことになるわけである。

以下、『夜の寝覚』が『住吉物語』の設定をいかに受けとめ、そこから『夜の寝覚』らしさをいかに展開させているかを見極めたいと思う。

一、音楽と人物の継子譚的対立構造

両物語の女主人公たちは、そもそも実母に育てられず、父との特別な関係のうえで育っている。⁽¹⁰⁾まず、両物語の女主人公の家族構成について対比してみよう。

継子苛め譚の枠をそのまま取り入れている現存本『住吉物語』の姫君の父には、「ふるきみやばらの御むすめ」（二三頁）と、「ときめくしよ大夫の御むすめ」（二三頁）という二人の妻がいた。ヒロインである「ひかるほど」（二三頁）美しい宮腹の姫君は、七歳の時、母をなくす。妻の死以来、父左衛門のかみは、継母の姫君に対する苛めをきらい、乳母のもとで姫君を育てていく。左衛門のかみの姫君に対する愛情は、「いづれもかしつきながら、此のひめぎみはずぐれてかしつき給ふ」（二六頁）というぐあいに、継母腹の姫君達への愛情より一段と優っている。

一方、『夜の寢覚』の場合、時の太政大臣には、按察使あせつし大納言の娘と帥宮腹の娘という二人の妻がいたが、前者が息子二人、後者が娘二人を残して早くに死んでしまう。『住吉物語』と異なり、娘二人が同じく宮腹の母から生まれたという設定である。同じ妻から生まれた姉妹であるにもかかわらず、太政大臣の中の君に対する愛情は格別である。物語の展開について、男兄弟は大君と左衛門督側、中の君と宰相中将側というぐあいに対立していく。

ここで注目したいのは、『夜の寢覚』が継子譚の設定を持ち込みつつも、継子譚の対立的人物構造を直接的にはとらず、姉大君との関係も同腹の姉妹という設定をとっているという点とである。本当の姉妹であるからこそ、一人の男性を巡る三角関係はよりいっそう深刻になるわけであり、『夜の寢覚』はこの設定を用いてそれぞれの人物の対立と葛藤を語りつくしているのである。

『夜の寢覚』の冒頭には、姉大君の男君との縁談が決まってから間もなく、中の君と男君が正体誤認の上で契りを結んでしまう場面が速いテンポで描かれる。『住吉物語』の男君少将は姫君に求婚したのに、継母の悪巧みにより求婚の相手が三の君へと取り違えられている。これに比べ、『夜の寢覚』の男女主人公の関係は不可抗力のものに成り代わっているわけである。そもそも、男君との関係をめぐる姉妹の運命は、音楽

の資質と密接に関係して展開しているといえる。

『夜の寢覚』のヒロインである寢覚の中の君は、十三才の八月十五夜と十四才の八月十五夜の二回にわたって天人の予言を授かっている。それは、

小姫君の御夢に、いとめでたくきよらに、髪上げうるはしき、唐絵の様したる人、琵琶を持って来て、「今宵の御箏の琴の音、雲の上まであはれに響き聞こえつるを、尋ね詣て来つるなり。おのが琵琶の音弾き伝ふべき人、天の下には君一人なむものしたまひける。これもさるべき昔の代の契りなり。これ弾きとどめたまひて国王まで伝へたてまつりたまふばかり」
(卷一、一七〜八頁)⁽¹⁾

という、いわゆる第一予言と、

「教えたてまつりしにも過ぎて、あはれなりつる御琴の音かな。この手どもを聞き知る人は、えしもやなからむ」とて、残りの手いま五つを教へて、「あはれ、あたら、人のいたくものを思ひ、心を乱したまふべき宿世のおはするかな」
(卷二、一九〜二〇頁)

という第二予言の二つの予言である。

この二つの予言に関しては、これまで男君との関係に生涯悩まされる中の君の人生をそのまま予告しているような第二予言の方が、第一予言の方より重要なものと捉えられてきたといえる。⁽¹²⁾「人の世のさまざまなるを見聞きつもるに、なほ寝覚めの御仲らひばかり、浅からぬ契りながら、よに心づくしなる例は、ありがたくもありけるかな」(巻一、一五頁)という、物語冒頭の語り手の嘆きと考え合わせて、第二予言のほうが物語の主題を指し示すものと捉えられるからである。

対照的に、第一予言のほうは少なくとも現存五巻には実現していないと見るのが通説である。⁽¹³⁾ここでは、予言の実現の可能性はさておき、音楽の伝授に関わる第一予言が姉妹の運命に影響し、女君の「心を乱したまふべき宿世」につながっていることにしばらく目を向けてみよう。

そもそも物語の冒頭で父太政大臣から中の君は箏の琴、姉大君は琵琶を教えられていたが、⁽¹⁴⁾夢の天人の顕現以来、中の君は姉大君にもまして上手に琵琶を弾く。そして、大君から「つねに弾きたまふ箏の琴よりも、これこそすぐれて聞こゆれ。昔よりとりわき殿の教へたまへど、つねにたどたどしくてえ弾きとどめぬものを、あさましき君の御様かな」(巻一、一九頁)と、羨まれる。この事件からすでに姉の運命を奪う妹という姉妹の運命が暗示されているといわれているように、⁽¹⁵⁾天人から授けられた中の君の音楽の資質は姉大君との仲を運命

的に引き裂く誘因として仕掛けられているのである。

さらには、中の君と男君の最初の契りの場面にも、中の君の箏の演奏は絡んでいる。乳母の見舞いのために偶然九条に行った男君は、物忌みのために九条に来ていた中の君の美しさに魅せられてしまう。男君は「箏の琴は、弾くらむ人ゆかしく心とどまりて」(巻一、二八頁)と、中の君を垣間見ている段階から箏の弾き主に引きつけられるのである。そして、女君を垣間見てからは、中の君と和琴と琵琶を弾いている対の君や但馬守の娘とは、格段の差があると認識してしまう。箏の琴に寄りかかっている中の君を見た男君は、まるで「むら雲のなかり望月のさやかなる光を見つけたる」(巻一、二九頁)かのような気持ちになるわけである。

『夜の寝覚』の三角関係をめぐる誘因として働く琴は、『住吉物語』でも三人の關係に影響している。男君は、秋の夜の「つまをとやさしきしやうのこのね」に、『我がかたらひそめし人こそことをば引くとときしか』(四七頁)と、結婚相手が宮腹の姫君から三の君へと取り違えられたことに気づくのである。夫の姉に対する恋の想いを知るよしもない三の君は、無邪気に姉の演奏を誉めて、琴の弾き主が宮腹の姫君だといふことを男君に知らせてくれる。男君はそのような三の君を「いとおしみながらも」姫君に対する恋の想いはいっそう強くなる。これ以降、『住吉物語』の中で、三人の關係をめぐる心

の葛藤の描写は見当たらない。

一方、『夜の寢覺』の姉妹の關係は、男君をめぐって深刻に對立し、やがて中の君が広沢に身を引くに至る。

ついに大君は夫と妹の關係を知り、中の君を遠ざけるようになる。姉大君の心にまず思ひ浮かぶのは、「我よりは、よろづのことに、いとめでたくすぐれたる君なれば、げによろしくは思ひたまはじを。いかにこよなくおぼしくらぶらむ」(巻二、一七二頁、傍線引用者)と、夫からあれだけ優れている妹と常に見比べられていることが悔しいという氣持ちである。他人でなく妹であるだけに、かえって「よその人よりはいとうらめしく」(同)なるわけである。大君の中の君に對する「我よりは、よろづのことに、いとめでたくすぐれたる君」という思ひには、中の君の音楽の資質に對する以前からの羨みが含まれているのは、もちろんである。

夫の愛情を妹に奪われた姉大君の苦惱と嫉妬、葛藤は、『住吉物語』の無邪氣な三の君の姿とは對照的ですからある。嫉妬する妻に日頃とは異なる魅力を感じて優しく慰めようとする夫を見て、その夫は妹にはもつと優しく愛情を注ぐに違いないと、大君の嫉妬心はエスカレートするばかりである。そのため大君はついに「げにと、たわむところなく、くせくせしく、なだらかなる氣色のみ、まさりたまへば」(巻二、一九一頁)と男君から見られるにいたる。

中の君のほうは、「かやうなるほどは、琴掻き合はせ、何となく思ふことなかりし、いつなりけむ」(巻一、八二頁)と嘆きながら、姉と共に琴を調べあわせていた頃を振り返る。やがて、大君側の態度に堪えられず、中の君は出家した父のいる広沢へと向かうことを余儀なくされるのである。次の歌は中の君のこういう苦衷を詠んだものである。

立ちも居も羽をならべし群鳥のかかる別れを思ひかけき
や (巻二、一九七頁)

このように、物語は遠のいてゆく夫婦の仲と、男君の中の君に對する募る想いを描き出して、深まっていく三人の葛藤をていねいに語っていく。『夜の寢覺』は、『住吉物語』のように直接的に継子譚的な親子關係をとらず、姉妹の結婚相手が取り違えられる設定を取り入れることにより、三角關係の對立をより複雑で深刻にしていることが認められる。そこには、中の君が天人から授けられた音楽の資質が深く関わっているのである。音楽との關係については二章で再度述べたい。

二. 物語の轉換と音楽伝承譚の大団円

いわゆる継子譚の型は単純化すると、A. 継母の迫害、B. 継子の流離、C. 靈験と救出、D. 結婚と繁栄というぐあいに、迫

害―流離―靈験と救出―結婚(繁栄)の構成をとるといふ。⁽¹⁷⁾この図式に従えば、『住吉物語』の姫君における住吉への脱出は、継子の「流離」に当たり、物語は姫君の住吉への脱出以降、男女主人公の結婚と繁栄に向かって物語的転換を迎えるといえる。

ここでは、両物語の女君が迫害(苦難)を乗り越えて結婚と繁栄という大団円を迎えるにあたって、住吉と広沢という場所の意味と楽器の役割について述べたいと思う。

『住吉物語』の姫君の父、左衛門のかみは、亡妻の「われなからん後までも、このおさなきもの、ひとみなみならんふるまひせさせ給ひ、こときんだちにおぼしおとすな」(二五頁)という遺言に従い、姫君の入内準備を急ぐ。一方、継母は「むくつけ女」とたくらみ、姫君が「六角堂の別当法師」という怪しい法師を通わせると夫を騙す。結果的に姫君の宮仕えは中止となるが、このたくらみは男君の結婚相手を三の君へとすり替えた結婚妨害に次いで、姫君に対する継母の二回目の虐めに当たるといえる。

これにとどまらず、継母は、入内中止の代わりに左兵衛のかみと姫君の縁談を成就させようとする夫の計画を、また中止させようとたくらむ。例の「むくつけ女」の提案により、七十才の「かずゑのすけ」という翁をして姫君を盗ませることを計画するが、このことは姫君に同情する「しきぶ」といふ

人物により事前に姫君側に漏らされる。「今までながらへておはします心うき」(八三頁)と嘆く姫君のために「じじう」は、故母宮の乳母が尼になって住吉で暮らしているということを知り出し、住吉の尼に助けを求める。やがて姫君の住吉への脱出が実現するのである。

ところで、住吉への脱出に際して姫君が持って行く荷物は、くしの箱と琴である。⁽¹⁸⁾ここで、改めて琴に注目してみよう。吉海直人はくしの箱と琴が亡母の遺品でもあり、姫君を守護するものでもあるとして、『落窪物語』の姫君も櫛をもって出奔していると注をつけている。⁽¹⁹⁾ここでは櫛と琴が亡母の遺品であることはさておき、琴が物語の新しい展開のための素材として改めて用いられていることに目を向けたいのである。

姫君の失踪後、彼女の居場所を知らせてくれるように神仏に祈り続ける男君は、長谷寺に籠もって七日間修行を行い、ついに霊夢をみる。姫君本人が夢に現れて「わたつ海のそこともしらずわびぬればすみよしとこそあまはいひけれ」(一一一頁)と自らの居場所を告げる夢である。この夢だけを頼りに住吉に向かった男君を姫君の居所へと導くのは、姫君の弾く琴の音であった。

日も暮れれば、まつのもとにて、「人ならばとふべき物を」など打ながめて、たゞすみわづらひ給ひける。さら

ぬだにもたびのそらはかなしきに、夕浪千鳥あはれにな
きわたり、きしの松風物さびしきそらにたぐひて、こと
のねほのかに聞こえけり。此のこゑりつにしらへて、ば
んじきでうにすみわたり、是をき、給ひけん心、いへば
をろか也。『あなゆゝし。人のしわざにはよも』など思ひ
ながら、其の音にさそはれて、(一一八頁、傍線引用者)

吉海直人は「人ならばとふべき物を」という思いに答える
かのように琴の音が聞こえてきたとして、琴が呪術的な機能
を果たしていると注をつけている。⁽²⁰⁾つまり、住吉は姫君の忌
み籠もりの場所であり、男女主人公を邂逅させる場所になる
が、その住吉へと男君を導くのは、姫君の琴の音だといえる。
やがて、琴の音の導きにより邂逅した二人の主人公は、新し
く結ばれ、結ばれた二人のために改めて音楽の饗宴が開かれ
るのである。

さて、姫君を伴って帰京した男君は、継母のさらなるたく
らみをおそれて、二人の間の子供が七才と五才になるまで姫
君の出自を隠し通す。子供の袴着の場を借りて姫君と父左衛
門のかみを再会させるのである。失踪していた娘が幸せな家
庭を築いていることを知った父は感激にくれる。すべてが明
らかになり、継母の娘たちも母を嫌うようになるが、姫君は
異腹の姉妹たちを引き取る。歳月が流れ、姫君の娘は十八才

で女御に入内するなど、姫君一家は「末迄はんじゅうして目
出度」なるわけである。

このように、男女主人公が住吉で邂逅して結婚したのちは、
姫君には父との再会と一家の栄華という大団円が待ち受けて
いたのであった。

一方、『夜の寝覚』の中の君は、すでに述べたように、男君
との関係から姉大君と疎遠になり、昔を偲びつつ広沢へと向
かう。これが中の君の決断した最初の広沢行きである。また、
中の君は中間欠巻部分を経て巻四において、いわゆる生霊事
件のときにももう一度広沢に赴いている。中の君は、姉大君
の死後男君の正妻になった女一宮の病床に生霊となつて現れ
たと噂されるが、このときにも彼女は広沢に赴いているので
ある。現存本では二回に渉るこうした中の君の広沢行きを、
『住吉物語』の姫君の住吉への出奔と関連づけて考えてみよう。

まず一回目では、中の君が広沢に赴くと、男君は中の君を
慕う心に耐えられず、雪を冒して追いかけて広沢へと赴く。そ
して、中の君との運命の契りの日、秋の月の下に鳴らされて
いたあの箏の琴の音を耳にするのである。⁽²¹⁾再び聞く中の君の
箏の琴の音に、男君の心は感無量になる。しかし、『住吉物語』
の男女主人公の住吉での邂逅とは異なり、中の君は雪を冒し
て広沢まで尋ねてきた男君に会おうとしない。男女主人公の
心はそれぞれに抱える悩みで満ちているものの、中の君一家

は、姉大君に味方して中の君と男君との關係を疑った兄左衛門督が新年の挨拶に広沢を訪ね、次兄の宰相中將もかけつけたので、久々に一家団欒の場を迎えるわけである。

中の君が二回目に広沢に向かうのは、すでに述べたように、いわゆる生霊事件が原因であった。中の君自身以前の広沢行きを思い浮かべつつ、「いくかへり憂き世の中をありわびてしげき嵯峨野の露をわくらむ」(巻四、四一二頁)と、苦惱にさいなまれる度に広沢に身を引く因縁を詠んでいる。苦惱に追いつめられた中の君はやがて出家を思い立つ。父入道もためらいつつも娘の出家を許すことになる。だが、この消息を聞いた男君は、石山の姫君とまさこ君の二児を伴い、広沢へと赴く。そして、父入道に中の君との關係をすべてうち明ける。中の君の妊娠という事実までわかり、中の君は出家を思いとどまらざるを得なくなるのである。父入道は孫の石山の姫君の美しい姿を見て、娘にかなえられなかった後の夢が実現する予感にひたり、ひたすら感激する。中の君自らも父入道に恥じ、出家への未練が残るものの、我が子三人の成長に感動の気持ちで隠せない。

一家の帰京を前に入道が管弦の宴を催して、石山の姫君が箏の琴、まさこ君が横笛、中の君が琵琶を弾くという盛大な音楽の饗宴が開かれる。男女主人公の心は、一方は、またしても中の君と女一宮という二人の女性に挟まれて悩み、帝の

中の君に対する恋の想いに嫉妬しつづけて、もう一方は、男君の執拗な愛情に悩み、出家の望みが未だに断ち切れないという具合である。だが、男女主人公の微妙な内面の葛藤にもかかわらず、男君は右大臣の位にのぼり、中の君の身内もみな昇進するという繁栄ぶりを見せる。

このように、『夜の寢覚』の中の君は、悩みに耐えきれず広沢に赴くたびに、常に家族の和みと繁栄という結果をとっているといえる。中の君一家の帰京前の音楽の饗宴から「これ弾きとどめたまひて、国王まで伝へたてまつりたまふばかり」という第一予言が実現したと音楽伝承譚的結末が論じられているように、⁽²²⁾物語は結婚相手の取り違えという設定から、結果的には中の君一家の繁栄という大団円を導いているといえるよう。

亡き姉の娘も加えて三人の子供と男君に伴われて帰京する中の君の姿には、住吉から帰京する『住吉物語』の姫君が重ねられ、孫石山の姫君の美しい成長に感動する入道の姿から姫君の父左衛門のかみを、そして中の君一家の繁栄からは『住吉物語』の「大しやう・ひめぎみ、末迄はんじやうして目出度くぞおはしける」を思い起こさずにいられないのである。また、男女主人公の出逢いと再会に絡んでいた楽器は、主人公一家の繁栄の饗宴にも使われていたのである。

とはいっても、継母という悪役が取り除かれると、住吉で

男君と結ばれて帰京した姫君に、再会・繁栄という大団円が待ちうけていた『任吉物語』の場合とは異なり、『夜の寢覚』の中の君にはまだまだ悩みが絶えない。そして、男君との關係をめぐる本妻、女一の宮と中の君の葛藤、中の君の出家への未練、男君の執拗な嫉妬など、一家の榮華という現実の裏側にうごめいている男女主人公の悩みを語りながら現存本『夜の寢覚』の幕はおりるのである。

三、新しい主人公像の創造

『寢覚』こそ、取り立てていみじきふしもなく、また、さしてめでたしといふべき所なけれども、はじめよりただ人ひとりのことにて、散る心もなくしめじめとあはれに、心入りて作り出でけむほど思ひやられて、あはれにありがたきものにてはべれば。〔無名草子〕、二三四頁(23)

『夜の寢覚』は右の『無名草子』の評価からも窺えるように、物語全体を通じて女君の心の展開を地道に描き出していることと知られる。そして、その女君は、悩みの絶えない人生を生きながらも自らの心を見つめ続けて成長していく人物と位置づけられている。しかし、そういう女君のことを執念深く想い通す男君の方は、皮肉にも、

また、関白こそ、憎きものうちに入れつべけれ。中の上、人より前に見染めて、さばかり浅からぬ契りのほどをさしも思はず、たまたま行き逢ひても、それを、限りなくうれしくめでたしと思ひもあらで、はかなき一言につけて言ひ悩まし、侘びしめなどする、いと心づきなし。〔無名草子〕、二三三頁

と、「憎きもの」と評されている。

こうした「憎きもの」・「心づきなし」という男君に対する評は、『無名草子』が説明しているように、女君を「はかなき一言につけて言ひ悩まし、侘びしめなどする」嫉妬と愛執に対する非難であろう。男君は現存本の結末部分でも中の君に対する帝の愛情に嫉妬して、次のように中の君を苦しめているのである。

懲りずまなれど、ものついでに、なほえ忍び果てず、「内より立ち返り御消息はありや」と問ひ出でたまひたるに、「さればよ、例の」とうるさければ、「あめりしかど、いさ、見ずなりにけり」とのたまふを、「さは、いづくへか散り失せにし」と尋ねたまふに、〔卷五、五四四頁〕

このような男君の嫉妬深さのために、中の君の心は「いか

でか、人の心かくしもあらむ」と、男君からだんだんと離れてゆき、出家を志向してしまう。ついには、現世に対する執着を諦めるかのように「この世は、さはれや。かばかりにて、飽かぬこと多かる契りにて、やみもしぬべし」(巻五、五四六頁)と、独白するに至るのである。

「憎きもの」の男君とは対照的に、『夜の寢覚』の女君は絶えない「寢覚の御仲らひ」の悩みを乗り越えて、やがては運命に翻弄される十五才の少女から、恋の悩みを家族愛や自らの成長へと昇華させる母と女になりおおせている。

『夜の寢覚』の男君の理想性退潮は、常に美質と色好み性を備えて物語の主人公として君臨してきた男の物語史に、女の物語としての『夜の寢覚』を切り開いたと捉えられている。⁽²⁴⁾「憎きもの」の男君像は中の君の内面の成長とともに対照的に語られて、「いみじき心上來」⁽²⁵⁾な女の物語としての『夜の寢覚』を引き立てているのである。

さて、『夜の寢覚』が類似する設定を『住吉物語』から取り入れているとするなら、『夜の寢覚』の執念深い男君像は『住吉物語』の男君像とあまりにも良い対照をなしている。

『住吉物語』の男君は「いかにもおもふやうなる人「も」がな」(三四頁)という、色好みな好奇心から始まって、生涯姫君を理想的に想い通すといえる。継母のたばかりにより結婚相手が姫君から三の君へと取り違えられたにもかかわらず、

男君は姫君に対する想いを諦めない。そして、三の君に対する思いやりも忘れない。三の君は夫の姉に対する恋の想いを知らず、姉に対して常に同情する態度を見せており、男君はそのような三の君を「見すてがたく」思う。みずからも二人の女性の挟間で悩み続け、執拗な嫉妬深さから中の君を苦しめた『夜の寢覚』の男君とはきわめて対照的といえる。

また、『住吉物語』の男君は姫君と結ばれてからも継母のさらなるたばかりを避けるために、姫君の出自の公開をより安全な時期まで見合わせる綿密さを見せる。姫君は理想的な男君に導かれて、そのまま栄華の道をたどっていくのである。

『住吉物語』の理想的な男君が『夜の寢覚』の嫉妬に苦しむ「憎きもの」の男君へと変貌していく中で、継母の虐めから男君に救われる存在でしかなかったか弱い姫君は、運命に翻弄されながらも絶えず成長していく『夜の寢覚』の女君へと変わっていったのである。

むすび

以上、見てきたように、『夜の寢覚』の作者は、継母の虐めにより姉妹の結婚相手が取り違えられるという『住吉物語』の設定を不可抗力の取り違えにすり替えることにより、新しい主人公像を創り出すと共に物語のリアリティーを深めたといえる。作者は、人物の葛藤をより深刻なものにするために、継

子譚的な対立構造をベースに、予言による音楽伝授を巧妙に取り込んでいたのである。

類似する設定の両物語は、いかにも対照的な展開を呈した。現存本『住吉物語』は最後まで三角関係をめぐる主人公たちの葛藤にふれず、主人公一家の栄華と繁昌を語る大団円となっている。しかし、『夜の寝覚』では、結婚相手の取り違えという悲劇的な事件が、男女主人公のすれ違う運命を暗示する伏線になっている。また、男君をめぐる姉妹の葛藤、男君の悩みといった登場人物の感情の対立は、物語の展開を導く重要な要因として働いている。『夜の寝覚』の作者は、『住吉物語』の裏側に潜在していた心の葛藤に目を向けたのである。

現存本『住吉物語』の内容から古本を考えることが許されるなら、古本『住吉物語』の理想的な男君像が、嫉妬と執着によってしか女性への愛を表現しない『夜の寝覚』の男君へと変貌していったと思う。そして、女君は、男君像の変化とともに、か弱い少女から成長して強い女性や母へと変貌していったのである。

『住吉物語』と類似する設定を取り入れながらいかにも対照的な男女主人公像を創りだした『夜の寝覚』を、『住吉物語』と対照して考察することにより、古本『住吉物語』という古典の影響を受け、その設定と話型を積極的に活用し再創造して、物語のリアリティーを深めていった平安物語史の流れを

いささか見届けることができたと思う。

注

- (1) 現存本は鎌倉時代(一一八〇)〜一三三三)に改作されたとされているのが通説であり、現存本の祖本は『無名草子』(一二〇二年頃)以後『風葉和歌集』(一二七二)以前に成立したと推定されている。(市古貞次『中世小説』至文堂、一九五一)
- (2) 『源氏物語』以前、十世紀円融朝(九六九)〜九八四)に成立したと推定されている。
- (3) 『日本古典文学大辞典』第三卷(岩波書店、一九八四)五六三頁。
- (4) 武山隆昭「住吉物語の祖本と古本——語彙の上からみた祖本の内容と成立に関する考察——」(『名古屋大学国語国文学』三二六、一九七五)
- (5) 代表的なものに、堀部正二「新資料による住吉物語の一考察」(『中古日本文学の研究』所収。教育図書、一九三三)、小木喬「鎌倉時代物語の研究」(東寶書房、一九六一)などが、現存本『住吉物語』と古本『住吉物語』の内容を基本的に同じ筋と捉えている。
- (6) 上坂信男「住吉物語の古物語性」(『物語序説 増補版』有精堂、一九八一)

(7) 『住吉物語』本文の引用は、底本を影月堂文庫所蔵『住吉物語』

(近世中後期写本) にしているという、吉海直人編著『住吉物語』(和泉書院、一九九八)に拠り、頁数を示す。異本群が数多い『住吉物語』を一つの写本で論じるのは大変危ないことであろうが、ここでは異本群の本文にはふれないことにする。異本群の問題はこれからの課題にしたいと思う。

(8) 『夜の寢覚』の作者については、『更級日記』の著者、菅原孝標女とする伝えが鎌倉時代から行われてきた。その根拠は、藤原定家筆『更級日記』の奥書である。定家の奥書をさらに裏付ける確証は得られないが、石川徹「夜半の寢覚は孝標女の作と思う」(『帝京大学文学部紀要』一九八一年三月)、鈴木一雄「『夜の寢覚』と『更級日記』の作者」(『平安時代の和歌と物語』桜風社、一九八三)等により、裏付けられている。

(9) 三角洋一は、『住吉物語』と『夜の寢覚』の類似する設定に關して、「物語的浪漫への傾斜」(秋山虔編『王朝文学史』東京大学出版会、一九八四)において早くも注目している。本稿ではこの着目から一歩進み、『住吉物語』の設定を借りた『夜の寢覚』が男主人公像を変えることで成し遂げた物語的發展を見届けたいと思う。

(10) これを継子譚の特徴と捉えられるなら、足立彌子は、『夜の寢覚』発端部と継子物語——「母」物語としての位相——(『中古文学論攷』第二二号、一九九一)で、『夜の寢覚』は継子譚を取り入れることにより、中の君に母としてのつらさを認識さ

せていると論じている。

(11) 以下、『夜の寢覚』の本文の引用は、『夜の寢覚』(鈴木一雄校注、新編日本古典文学全集28、小学館、一九九六)に拠り、巻数と頁数を示す。

(12) 鈴木一雄は、一九頁の頭注で、「あはれ、あたら、人の」以下の天人の言葉は、女主人公の将来に対する予言であり、物語冒頭の主題は、ここに天人による裏付けを得たことになり、物語はこの悲劇的な予言に沿って進行すると述べる。なお、第一予言の方は少なくとも現存五巻には現実化していないと主張する。

(13) 注(12)参照。だが、第一予言に關しても『夜の寢覚』から音楽伝承譚の要素を読みとることにより、その実現可能性を論じて、物語における意味と役割を積極的に考える立場もある。坂本信道は、「音楽伝承譚の系譜——『源氏物語』明石一族から『夜の寢覚』へ——」(『文学』一九八八年四月)にて、中の君の娘、石山姫君が立后することを改作本『夜寢覚物語』から想定して、一族の秘曲伝承者が后位に即くことにより、中の君を通じて天人の秘曲を国王まで伝える第一予言が物語内で実現する可能性を論じている。

(14) 姫君のいとすぐれて生ひたちたまふに、姉君には琵琶、中の君には箏の琴を教へたまつりたまふに、おのおのさとうかしこく弾きすぐれたまふ。(巻一、一六頁)

(15) 『夜の寢覚』一八頁頭注。

(16) 吉海直人「『住吉物語』の琴をめぐって」(『國學院雜誌』一九

八二年七月)にて、氏は、琴が結婚相手をすり替えた謀りを発覚させる契機として、また住吉における邂逅を可能にするシグナルとして、二度も重要な役割を果たしている」と述べている。

(17)日向一雅『源氏物語の主題——「家」の遺志と宿世の物語の構造——』(桜風社、一九八三、二二二頁)、市古貞次は、中世継子物の十五の作品を比較して、いわゆる継子譚の型が、一、母の死と継母、二、愛人・婚約者、三、継母の迫害、四、姫の苦難、五、母の霊の加護、六、姫の動静、七、男の苦心、八、神仏の加護、九、再会(結婚)、十、賞罰・応報の十項目を取り出して対照しているが「市古貞次『中世小説の研究』(東京大学出版会、一九五五)一〇〇頁)、日向がそれをこのようにさらに単純化させている。

(18)さよふくるほどに、車のをとの出来たれば、くしの箱と御ことばかりぞ持ち給へる。(九四頁)

(19)注(18)参照。

(20)テキスト、一一九頁、注(1)。

(21)聞きたまへば、端近うながめたまふなるべし、秋の月にまどはれし箏の琴掻き鳴らされたる、所がらにや、我もそぞろに浮きたちぬばかり、聞こゆなり(テキスト、巻二、二〇九〜二一〇頁)。テキストの現代語訳は、「かつて秋の月の夜思わず心を奪われたあの箏の琴を掻き鳴らしておられるのが、…」である。この本文に関して、『寢覚物語全釈』(関根慶子・小松登美共著、学燈社、一九六〇)では、「いつぞや秋の月夜に自分が夢中に

なってしまったあの箏の琴が弾きならされていて」と現代語訳をして、「校注には、大納言が中の君を始めて垣間見た晩のことになっているが、季節が合わないし、助動詞「き」の用法からも首肯し難い」と注をつけている(上、三三二頁)。ちなみに二人が出逢ったのは、去年の七月十六日である。とりあえず、ここでは、テキストと全釈の現代語訳に従い、男君が、中の君の箏の演奏を耳にしながら二人の出逢いの日聞いた、中の君の箏の琴を思い浮かべていることにしておく。

(22)注(13)の坂本説参照。

(23)『無名草子』の引用は、『松浦宮物語・無名草子』(久保木哲夫他校注、新編日本古典文学全集40、小学館、一九九九)により、頁数を示す。

(24)横井孝『女の物語のながれ——古代後期小説史論——』(加藤中道館、一九八四)、二一三〇頁。

(25)『無名草子』は、「すべて、中の上はいみじき心上衆とこそものすめれ。わりなく人の惑ふ折は、いみじくあやにくだち、心強く、また、思ひ絶えむとすれば、あはれを見せむとしためるを」(二三〇頁)と、中の君を評している。